ウオッチング多摩ニュース

第９３号
2019年8月1日
ウオッチング多摩の会

令和元年初議会傍聴記

平成最後４月の地方統一選挙で26議席中５議席が入れ替わり、新議員が20％超えとなり６月議会に、新しい風を期待傍聴した市民席からの雑感報告です。

入れ替わった議員（敬称略）

・新人議員
　山崎ゆうじ　岸田めぐみ　斎藤せいや
・元議員
　篠塚　元　白田みつる

議会に新風を

新人・元議員を合わせて20％超の議席になれば、新しい視点・角度からの新風に期待感をもって傍聴したがその変化の兆しもなく、全く相変わらずの議会で閉会となってしまった。

新三議員の皆さんはそれぞれの所属会派・先輩議員の主張を引き継いだものを取り上げた一般質問・委員会など、初登板としては致し方ないものにならざるを得なかったのか。

会派の看板・地盤をひき継いだ議員としては当然かもしれない。変わればいいとは思わないが変化がイノベーションのきっかけとなることは世の常であり、グループとしての支援者も当然新風を期待して送り出した筈と思う。

これからの４年間の活動、市民から付託された議員としての存在力を発揮し是非その期待に応えてもらいたい。

返り咲いた元議員の奮起に期待

篠塚議員SDGsを質問するなら

「SDGs先端都市を目指して」の一般質問は、私たちにとってタイムリーで知りたい、やってほしい突っ込みを期待したが、表面的な確認的な質疑に終始してしまった。弊紙ウオッチングニュースでも新聞報道された時に、町田市、八王子市、日野市が上位にランキングされたのに多摩市はどうしたのか、と疑問を投げかけている。行政答弁の言い訳を聞くことになってしまい、都議会議員としての経験、野に下った浪人時代に広い視野と市民感覚を蓄えたはずの知見を期待していたのに。

SDGsの話で、多摩市の小学４年生にここ数年間グリーンカーテン授業で「なぜグリーンカーテンか」「クーラーでいいのでは」と質問をしてきたが、子供たちの答えに常に頼もしくさせられた。子どもたちといえば、今年１月の世界のリーダーが集まるダボス会議でスエーデンの16歳の少女が「私の家は燃えている」と題して、「大人たちは将来に希望をもって欲しくない、私の恐怖を共有し、今行動してほしい」、と環境活動家のグレータ、トーウンベリは訴え、会場は静寂と沈思に覆われたとのこと。

ＥＳＤを語るなら

議員からはＥＳＤ環境問題の質疑もあったが、多摩市の子供たちは子ども未来会議で市議会でのやり取り以上に、今の環境につき自分たちのこととして、自分たちが今できることからやろうと宣言している。

市長も議員もことあれば「子供たちの未来のために」と枕詞にあるが、地球が悲鳴を上げている今こそ行動を起こさなければ、地球温暖化を救う限界点にあり、大人たちにどれだけの認識・危機感があるのか子供たちのほうが不安になっている。

体育館へのクーラー設置、図書館建設のための公園緑の破壊、子供たちにどう説明できるのだろうか。

特集
寄稿　薗田碩哉　花谷修一
放課後子ども教室
３・４・５・６ページ

白田議員「市民・職員全てが安心に利用できる庁舎とは」の質疑。

市庁舎問題の質疑は多摩市民が「どうなってる」と最大関心事であり、時宜をえたものと期待したが、現市庁舎は建設から50年経過し安全な市庁舎かという視点からの質問に留まってしまった。これは大切な視点であり市庁舎建設は多摩市の長期的かつ総合的な展望に立ち、環境が救える多摩市の特質を生かしたモデルとならなければならない。

「他の公共施設の計画はしっかり進んでいる現在、市庁舎だけが、資金問題で先延ばしとは思えない」の指摘はその通りだと思う。10年以内には新庁舎建設計画が決まっているのに、なぜパルテノン多摩の大改修、中央図書館の建設と合わせた計画としないのかの追及をしてもらいたかった。10年は遠い将来ではなくすぐそこであり、新庁舎建設は先であっても多摩市の将来の展望をした公共施設全体基本構想の下でパルテノン80億、中央図書館50億でなければ、シナジー効果はおろか二重投資のリスクが生じるのは明白だ。空白のあった議員だからこそ市民目線に立った客観的主張ができたのではないか。

行政の市民参加と形式だけを整えて進められている公共施設建設を憂う

立派な建物・建屋だけで魅力的な場所となるのか。公共施設への投資優先順位を間違いないものにしてもらいたい。

パルテノン改修、図書館の計画に当たっては議会も長野県茅野市市民会館、武蔵野プレース等など多くの視察と検討を行ってきた。報告ではどこの市でも新しいハード施設以上にそこで行われるコトにお金をかけている。コトは人が行うことで人材（特に市民登用）への投資が行われていると聞いている。80億円のパルテノン改修、50億円とも言われている中央図書館のハードへの投資額と、コトを行う運営の投資バランスが取れたものになっているのか憂慮する。

立派な建屋だけでは魅力的な場所となり、市民が足を向けたくなる空間とはならない。

今からでも遅くない多摩市ならではの中央図書館へ

最近、ニューヨーク公共図書館の映画をみられた方々、ニューヨークまで出かけた方の感想を聞くにつけ、そこにこれからの図書館の多くの教訓があることを知った。

歴史・文化・市民感覚等などニューヨークのようにはいかないとは思っているが、図書館は市民が本を求めることもさることながら、来館者の求めている相談ごと・悩みごとに的確に対応できる人、人生リアファレンスの道案内的な人がいたら素晴らしく魅力的だ。

このようなスタッフをそろえることは簡単な話ではない、しかしハードに費やすお金とどちらを優先すべきか熟考しなければならない

新市庁舎建設に当たっては最上流行程のコンサルと選択肢を市民に

新市庁舎建設に当たっては多摩市の今後のまちの容を方向付ける重要なキーとなることは今更言うまでもない。

パルテノン多摩、中央図書館の検討に当たってはこれまで、行政も議会もその専門性をもたない理由から部分的に外部へのコンサルテーションを依頼してきた。

新市庁舎建設に当たっては、今まで以上に長期的（60年先）・総合的に時代背景の変化を踏まえた、専門性・客観性・他市などの実績を持つコンサルテーション依頼をすべきだ。特にデータリズムの時代でもあり客観的なデータをもとにしたシミュレーションを期待したい。

これまで行ってきた行政手法の基本方向を決定してからのコンサルではなく、最上流行程からの徹底的調査分析に基づく複数選択肢が提示され、市民が自分の意志でその選択をすることこそ、住民エゴにも責任を持てる他責としない自立した市民参画の時代を迎えることになれるのではないか。

市民自治・市民参加・市民協働、自分たちのことは自分たちで決められるまちと掲げた市長公約（口約ではなく）のカウンター民主主義の実践となる。市民を信頼してこそ市民自治が生まれるのではないか。

ウオッチング多摩の会　神津幸夫

学校と地域をつなぐ
「放課後子ども教室」の可能性

落合在住　薗田碩哉

●折角もらった民主主義をコケにした官僚たち

日本という国がアメリカの属国であることは「日米地位協定」を見るまでもなく、否定しがたい事実である。安倍首相のアメリカでの愛称は「トランペット」だそうだが、それは威勢よく進軍ラッパを吹くからではなく、トランプのペットだということだそうだ。日本はまさに第1の属国なのである。属国なら属国らしく、本国のしかるべき価値あるものをどんどん取り入れたらいい。教育制度もそのひとつではないか。

昔、アメリカ西部に押しかけた開拓者たちは次々と新しい町を作った。何の伝統も慣習もないところに雑多な人々がやってきて秩序ある町を作るにはそれなりの仕掛けが必要だった。まずはいちばん頼りになりそうな人物を町長にして権力を委ねた。町長が暴走しないように彼をチェックする議会と議員を選んだ。喧嘩っ早い荒くれ男を静めるために腕っ節の強いのを保安官に任命、未来を担う子どもの教育は大事な課題だから、みんなで相談して（これがつまり教育委員会）学校を建て、東部から教師を探してきて授業をさせた。こうして「大草原の小さな家」の世界が誕生し、町の自治が行われたのである。

わが多摩市の現状を、ご本家の西部の町と比較してみよう。市長さんは確かにみんなで選んだ。その人物に不満を持つ向きはあろうが、民主的に選ばれたことは間違いない。議員も確かに選んだが、市民の半分は議会にそっぽを向いているし、議会が市長の権力を監視し、チェックするという本来のお役目を果たしているか、いささか心もとないところもある。そこでわが「ウオッチング多摩の会」が存在価値を発揮しているのだ。

警察は、西部の町とは全く違って、市民のコントロールのもとにはない。はるか都心のお堀端の警視庁が支配しているし、西部の町で保安官を選んだ「公安委員会」は国と都道府県にしかない（それも市民代表という感じではない）。しかし、敗戦後、アメリカの占領下で市と人口5千人以上の町村に作られた自治体警察は、国家の指揮監督を受けることなく独立して、自己の経費を以って維持した警察組織であったことは思い出されてよい。それが廃止される1954年までは、アメリカ同様、日本でも市民の支える保安官が活躍したのである。

●子どもを育てるのは一に親、二に地域、三に学校

さて、教育の話である。子どもが社会の一員となるために十分な教育を受ける権利を持つことは当然である。それではその権利をいかにして保障するか。子どもに教育を受けさせるのは親の義務である。一義的には親が子どもを教育すべきなのである。実際、昔のサムライの家では、礼儀作法、論語の素読、剣術の稽古まで、息子の教育は一にかかって父親の役割だった。何しろ武士のお城勤めは朝から昼までの半日が普通だったから、午後は家に帰ってひたすら子弟の教育に努めた。武士にとっては主君への忠節とともに、あるいはそれ以上に教育が大切だった。跡継ぎを一人前にしなければ家の存続ができなくなるのだから。母親は良家の妻に迎えられるための娘教育に余念がなかったし、農民も商家も、次の世代を育てることに精力をつぎ込んできた。

学校というのは親の教育の補助装置として作られたといえる。親と言えども何でも教えられるわけではないから、しかるべき専門家を雇って子弟の教育の充実を図りたいと考えたのは当然だろう。西部の町では親が集まって教育委員会を結成、お金を出しあって場所を確保し、教師を募集してふさわしい人物を選んで学校を開いた。日本でも明治の初期には、村人が資金と人材を集めて作った学校が全国各地に誕生している。その後、明治政府の強権的な国づくりが進行し、教育は国家の支配するところとなった。親の教育権は奪われて教育勅語が金科玉条とされ、天皇陛下のために死ねる臣民を作ることが学校の目的になってしまった。

●制度はあっても魂のない コミュニティ・スクール

戦後、国家主義的な教育制度は解体され、町の教育を運営する教育委員会が置かれ、教育委員は自治体ごとに選挙で選ばれた。親と地域住民が主体となって学校を運営する仕組みが出来たのである。しかし、政府は１９５６年に公選制を廃止して任命制に変え、アメリカさんの折角のプレゼントを早々に返上してしまった。それでも教育委員会は首長の行政とは一線を画した別の組織として位置づけられ、時の権力からの「教育の独立」が制度的には守られてきた。だが、学校の権威主義的な体質はなかなか変わらない。学校は親や地域よりも上にあるという感覚は根強く、「学校に上がる」という表現を誰も怪しまない。学校に上がり損ねて不登校になる子どもたちが後を絶たないというのに。学校はもともと上になんかない、地域のただ中に、地域とひと続きのものとしてあるべきものである。

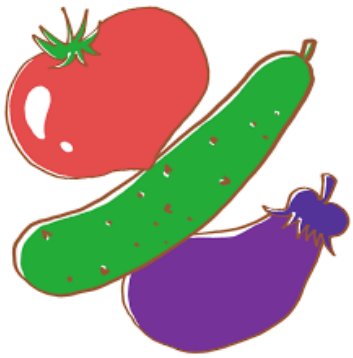
学校が子どもたちにとっても教師にとっても居心地のよい、交遊と人間形成の場であるためには地域社会との協働が必須の課題である。特にいじめや不登校が蔓延する現在の学校の状況を改善するには地域のパワーを学校に導入するしかない。文科省は夙に学社（学校教育と社会教育）連携を説き、さらには学社融合をうたうに至った。２００４年には地方教育行政法を改定して「コミュニティ・スクール」を誕生させた。保護者や地域住民が「学校運営協議会」を作って公立学校の運営に参画する仕組みである。ところがこれが活かされていない。15年経っても、この制度を取り入れていない学校が多いし、取り入れても形ばかりで、校長先生がお気に入りを集めた仲良しクラブがスクールボード（学校理事会）の実態であるところも少なくない。

●子どもファーストの放課後教室に 市民人財の活用を

学校と地域のホンモノの出会いを生み出す突破口となるのが「放課後子ども教室」である。放課後とは学校が終わったということであり、「放課」した以上は教師も手を出さない、子どもの自由な領分である。その昔は放課後に仲間と校庭で好き勝手な遊びをし、道草を食って遊びながら家に帰り、カバンを放り出して再び暗くなるまで外遊びに励むことができた。状況は一変し、そんな優雅な生活は今の子どもたちには許されない。放課後に待ち受けているのは塾とお稽古、スポーツクラブ、それでなければ学童クラブで安全に管理してもらうことである。共働きの親たちはそれこそが子どもの教育だと信じて疑わない。

「放課後教室」は、教室という名がついているものの、強制や押し付けとは無縁の子どもの解放区である。学校にあるから「教室」というが、それは何よりも子どもの安全が保障できるという利点に注目してのことである。「子どもの教室」である以上、子どもたちの希望から出発し、子どもたちの創意を伸ばすことが大切にされる。世話をするのは地域のおじさんやおばさん、人生を卒業しかかって何か手ごたえのある活動を求めている高齢者、高校生や大学生も子どもとのふれあいの中から新鮮な体験を得ようと関わってくれる。時間の都合がつけば、父母たちもそれぞれの特技を生かして支援することもできる。

もともと学校は、地域の交流空間として存在すべきものだ。赤ちゃんから高齢者まで、地域の多様な生活者が気楽にやって来て、おしゃべりをしたり、猛暑の日は涼んだり、体育館や音楽室を使ってスポーツや文化活動を楽しんだりすることもできる。そんな新しい学校のイメージを育てるのが放課後子ども教室の役割である。



多摩市「放課後子ども教室」拡充の提案

鶴牧在住　花谷修一

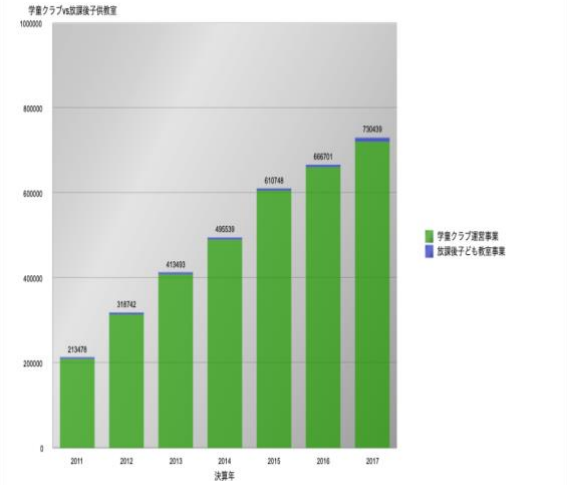
前稿の薗田先生のレポートを受けて多摩市における「放課後こども教室」の具現化について提案したい。

●「学童クラブ」と「放課後子ども教室」

もちろん「学童クラブ」という制度があることは知っている。「学童クラブ」は共働き家庭が多い中「放課」した後の1年生から4年生までの子供達の居場所を確保し指定管理者に安全の管理を一任するという制度である。共働きの親たちには「安全」を保障しその上に子どもの教育の場だと信じて疑わせず有償でそこに子どもを預かることで「安心」を買わせようとするものである。

市のこの制度への注力は並々ならないものがありこの事業に対する年毎の予算の伸び率は他のどの事業よりも大きく2017年度は7億円を超える費用を投じている。（グラフ　参照）

一方、「放課後子ども教室」も小規模ながら一部の学校でボランティアによって運営されている。私の知る現在行われているこの活動は地域のボランティアが週に1日、碁や書道を教えるというものでボランティアには1日に1000円が支給されるそうである。したがって市が投じるお金はわずかで同年度1000万円にも満たない。しかしその小学校の全学年が対象で希望すれば誰でもが無料で自由に参加できる。そして子供の好奇心が赴くままに地域のオジサン達が徹底的に付き合うことで、いつしか子供がオジサン達を凌いで東京を代表する棋士が誕生したのだそうだ。この例は多くのことを示唆している。



学童クラブの経費の伸びと
放課後子ども教室の経費
出典：多摩市決算報告書

●「放課後子ども教室」の理念と目的

放課後子ども教室の意義についてはすでに薗田先生が前稿で述べられているが、ここに改めてその理念と目的について記す。

子供達はそれぞれに独自の能力を秘めている。特に小学校高学年の頃になるとこの能力が芽吹く時である。その能力を大きく花咲かせるかどうかでその子の人生が決まると言っても過言ではない。

まず「放課後子ども教室」の第1の目的は子供達のこの能力や創意の発露の場である。学校の今の画一的な教育ではこれは難しい。共働きの家庭にその余裕はない。

第2に何よりも子供達の自由意志による居場所の提供である。自由意志というのが重要である。子供達が誰にも束縛されることなく自分で選び取り自分で決めるということの機会の提供である。

第3に大人達の活躍の場の提供である。幸い多摩市にはかつては日本の高度成長を担った方が一線を退いてその能力をもて余している方々が多い。また子どもの養育を終え時間的には余裕があり、大概は高学歴でその能力を何か社会のために役立てたい。あるいは何か活動をすることで少しでも家計の足しにしたいと考える奥様方がたくさんいる。さらには多摩市をはじめ近隣の大学に通う大学生たちである。彼らがこのような地域活動を通して社会と接することは彼ら自身にとっても有用な経験になるに違いない。

以上のような人材は多摩市の唯一の資産でありこの資産を活用する機会である。

第4に「学童クラブ」同様、大人達が子供達をそっと見守ることで子供達への安全の提供と親御さん達への安心の提供である。

第5に「学童クラブ」とは異なり「地域社会が子供教育の一端を担う」という理念である。

この目的と理念に沿って、今ある「放課後子ども教室」を拡充する。前述のような人材の協力を得

て各種のプログラムを準備し、子供達の好奇心を引き出す。

●町田市立南第3小学校「レコパン」の例

近隣他市の「放課後子ども教室」はどのように運営されているか？

薗田先生の紹介によって先日有志で町田市立南第3小学校の「放課後子ども教室レコパン」を見学した。

この日は夏休みに入った日であるにも関わらずレコパンが実施されていた。それゆえ学校関係者は見当たらない。お世話係が4、5名ほど居て多くの子供達が思い思いに過ごしていた。あるグループでは何やら工作していて上級生が下級生を教えているようである。またある部屋では子供達が読書に耽っていた。

全校生徒約300人程の学校で通常、学校のある日の放課後の3時間が「レコパン」の時間として毎日実施され、全生徒対象でそのうちの約70人から100人が参加するとのことである。お世話係（スタッフ）は全体では20人程いて毎日数人で代わる代わるお世話するのだそうである。

子供達は名札をつけていて、その裏にはバーコードがついており入出退はそのバーコードで管理する。したがって出入り自由、子供達が何を選択するかも自由なようでその所為で多少プログラムの人気に偏りが生ずるのだそうであるが子供達の自由意志を尊重しているとのことである。お世話係の仕事は子供達の見守りはもちろんのこと、時には子供達と一緒になって何やら相談している。そしてその日の記録を詳細に記すのも重要な仕事だそうでそのノートを見せていただいた。お世話係の時給は1000円、したがって一日3時間、月20日する人もいておばさんのアルバイトとしては結構な額になる。私たちへの案内も誇らしげで嬉々として働いている姿が印象的であった。

またお世話係とは別にプログラムを提供するコーディネーターがいる。コーディネーターは第3小学校「レコパン」の専用のコーディネーターもいれば町田市全体の学校をカバーするジェネラルコーディネーターもいるのだそうだ。このコーディネーターと言われる人にきっと多才な人がいるに違いない。

運営は町田市の助成事業で町田市、学校長、地域団体、有志の運営協議会によって執り行われる。特筆すべきは専用の教室、専用の事務所があることであろう。もちろんこれらは学校の空き教室であったに違いないが、レコパンのプログラムの実施場所であると同時にいろんな子供の遊び道具の保管場所であり、コピー機のような事務機器の設置場所でもある。やはりこのような場所は大々的に行うには必須である。

●提案

まず多摩市においても町田市並のことはやろう。そして多摩市民の中にコーディネーターとしてプログラムを提供できる人を募ってみよう。

碁、将棋、書道の他にも楽器、絵画、工作、各種スポーツを指導できる方、昔遊び、今遊び、プログラミング等SNSゲーム以外のスマホ、iPAD、PCの創造的な使い方を指導できる方、そしてストーリテラー、ビデオや朗読の鑑賞を子ども達と一緒にしたい方、幅広く募ればいろんな方の申し出があるに違いない。

そして何よりも参加協力するための金銭的なインセンティブも必要であろう。せめて「学童クラブ」の半額くらいは予算化したらどうか！　市民に還元するのだから決して無駄な支出にはならない。否むしろ直接的な「知の地域創造」に繋がる。

パルテノン多摩改修80億、図書館新設50億をかける「知の地域創造」に比べればどれほど安価で効果的なことか！

入会申込書

氏名
住所
電話・FAX
メールアドレス

■会費・カンパ振込先■
みずほ銀行多摩センター支店　1197246
「多摩市議会ウオッチングの会」

■申し込み■
「ウオッチング多摩」の会　代表　神津幸夫
〒206-0034　多摩市鶴牧 3-14-2-102
042-372-9496
HP:　http://watching-tama.com/

★年会費2000円を頂いております。